

ニコライ・アンドレイエヴィチ・リムスキー＝コルサコフ

交響曲第2番嬰ハ短調《アンターール》作品9

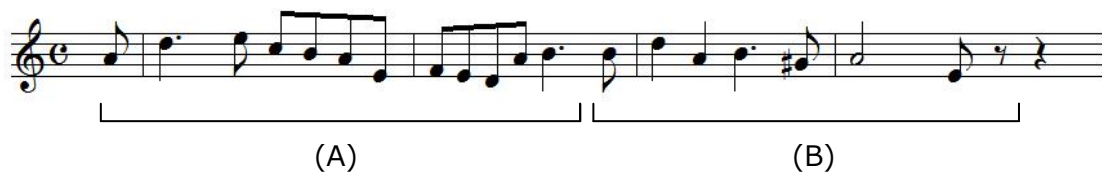
今年、2008年は、ロシア五人組を代表する作曲家、ニコライ・アンドレイエヴィチ・リムスキー＝コルサコフが亡くなってから100年目という記念の年にあたっています。それにちなんで、今回の演奏会で取り上げたのが、彼の交響曲第2番「アンターール」です。演奏される機会の非常に少ない曲で、今回が宮城県内での初演となるはずです。

リムスキー＝コルサコフが交響曲を作っていたこと自体が、現在では殆ど知られてはいませんが、彼は3曲の交響曲を完成しています。2番目にあたるこの曲は、彼がまだ20代の時に作られました。サブタイトルの「アンターール」というのは、6世紀頃にアラビアに実在した詩人の名前です。その波乱に満ちた生涯は「アンターールの物語」としてその地に伝承されていましたが、それがロシア人のオシップ・センコフスキーという人の手によってロシア語に翻訳されたものを読んだリムスキー＝コルサコフは、この主人公を題材にした交響曲を作ることを決意、この曲が生まれます。

物語は、人の世の醜さに愛想を尽かした主人公（とえばかっこいいのですが、実際は現実逃避のモラトリアム男）が、隠遁生活を送っている廃墟の中で夢を見るところから始まります。ある日、息を切らせて懸命に走ってくる可憐なカモシカが彼の前に現れました。見ると、そのカモシカは獰猛な鳥に追いかけているではありませんか。彼はその鳥に槍を投げつけて追い払い、カモシカを助けます。そのカモシカは、実は妖精の女王が姿を変えていたものでした。彼は女王の宮殿に招かれ、お礼にと「人生の3つの喜び」を贈られることとなります。それは「復讐の喜び」、「権力の喜び」、そして「愛の喜び」でした。しかし、復讐を遂げ、権力を得たところでアンターールの心にはむなしさが残るだけ、最後には満ち足りた愛に包まれながらも、彼は女王の腕の中で死んでいくのです。

ストーリーテラーとしてのたぐいまれな才能に恵まれたリムスキー＝コルサコフは、このプロットを元に、民族音楽風のメロディに華麗なオーケストレーションを施して、スペクタクルな音楽劇を作り上げました。後年この曲を大幅に改訂した時に「交響曲」という肩書きを棄てて「交響組曲」としたことでも分かるように、これは壮大な描写音楽なのです。

第1楽章「アンターールの夢」：映画やドラマの音楽のように、この曲には登場人物などをあらわすいわゆる「ライトモチーフ」が用いられています。廃墟を描写した冒頭の部分に続いて、ヴィオラによって奏される次のようなテーマが、主人公アンターールをあらわします（原曲は嬰ハ短調）。



前半(A)は有名なロシア民謡「トロイカ」(♪雪の白樺並木～)を思わせる甘美なメロディですが、後半(B)には力強さも感じられます(このテーマは全楽章至る所に登場し、完全な形で現れるのは20回を数えます)。曲調がガラリと変わって、フルートのソロが逃げまどうカモシカのテーマを奏します。これに続くダイナミックな部分が鳥との戦い、ひときわ鋭い鳴き声を残して、鳥は飛び去ります。音楽が静かになったところで、フルートによって朗々と奏されるのは、先ほどのカモシカのテーマが変化したもの、そう、あのカモシカは実は女王様だったのです。

第2楽章「復讐の喜び」:冒頭、チェロから始まり、ヴィオラ、ヴァイオリンと重ねられていく不安な音楽が、復讐のテーマです。と、そこに決然と金管楽器によって現れるのが、アンタールのテーマの後半部分(B)です。ここでは、オーケストレーションの粋を尽くして、おどろおどろしい世界が描かれます。

第3楽章「権力の喜び」:行進曲のようなキャッチーなテーマで始まる、屈託のない世界です。中間部ではチェロのピチカートに乗って、アルジェリア民謡を元にした、流れるようなテーマが弦楽器で歌われます。そのテーマはさまざまな楽器に受け継がれ、それに他のパートが彩りを添えるという、まさに職人的な音の綾が醸し出されます。その中で将来作られることになる「シェエラザード」に出てくるようなパッセージが現れるのにもご注目。

第4楽章「愛の喜び」:第1楽章の夢のシーンが再現された後、イングリッシュホルンから流れてくるのは、この世のものとは思われないほどの美しい愛のテーマ。それが全合奏でクライマックスを迎えると、そこにはハリウッド映画のような華麗な世界が広がります。次第に平静さを取り戻した音楽は、アンタールの死を暗示するかのように、静かに、静かに終わります。

作曲家は、1868年に作ったこの曲に1875年(第2稿)と1897年(第3稿)の二度にわたって大幅な改訂を加えています。今回は、初稿の形をあまり変えずに推敲し、オーケストレーションをより色彩的に手直した第2稿を用いて演奏します。おそらく皆さんが初めて生で耳にするであろう音の絵巻物を、存分にご堪能下さい。